

ポライトネス・ストラテジーとしての 「思う」と「생각하다」

—指示型の発語内の力を持つ文において—

李 鳳*

(e-mail: koreabong@imc.hokudai.ac.jp)

目 次

1. はじめに
 2. 先行研究
 3. 理論的背景
 - 3.1. ヘッジ
 - 3.2. 発話行為理論
 - 3.3. ポライトネス理論
 4. 分析方法
 5. 考察
 6. おわりに
-

1. はじめに

日本語の「思う」とそれに対応する韓国語の「생각하다」は、共にヘッジ(hedge)として機能している(李鳳 2009)。2つの語彙は、発語内の力を弱めて主に、ネガティブ・ポライトネス・ストラテジーの一つとして用いられる。しかし、その使用は、日本語と韓国語では相違がある。

(1) a. 日本の今の医療制度は間違っていると思う。

(森山 1992:110)

* 北海道大学大学院メディア・コミュニケーション研究院, 助教, 韓日対照研究

b. 乾杯したいと思います。

(森山 1992:112)

(2) a. 일본의 현재 의료제도는 잘못되었다고 생각해.

b. ?건배하고 싶다고 생각합니다.

(2ab)は、それぞれ(1ab)の日本語に対応する。(1a)に対応する(2a)では、「생각하다」が用いられている。ところが、(1b)を(2b)のように韓国語に対応させると非常に不自然な文になる(生越 2008a、李鳳 2008)。(1ab)、(2ab)における「思う」の用法とそれに対応する韓国語の「생각하다」の用法に差があることは、ヘッジの使用に関するポライトネス・ストラテジーの相違によるものであると考えられる。ここでは、とりわけ指示型(directives)の発語内の力を持つ文と共起する「思う」と「생각하다」について考える。そして、「思う」と「생각하다」の類似性と相違に関する性質が、話者と聴者の人間関係と相手にかける負荷度という 2 つの要因に基づく日本語と韓国語におけるポライトネス・ストラテジーの相違によるものであることを示す。

2. 先行研究

「思う」と「생각하다」に関する研究は、それぞれ、日本語学、韓国語学の領域において独立して研究されてきた傾向が強いと思われる。韓日対照研究の領域では、近年、「思う」と「생각하다」の用法に差があることが注目されはじめている(鄭夏準 2006、生越 2008a、李鳳 2008)。鄭夏準(2006)は、韓国語で翻訳されている日本の小説を対象とし、「思う」の韓国語の翻訳例を調べた。そして、「思う」が「생각하다」の他にも 10 種類以上のさまざまな表現に対応していることが示され、「思う」と「생각하다」の用法に相違があることはわかるが、体系的な分析は行われていない。また、同年度発表された生越(2008a)と李鳳(2008)は、「思う」と「생각하다」の用法の差がモーダルな用法にあることについて気が付き、議論が始まっている。しかし、その違いの性質を分析する試みはなされていない。従来の研究では、理論的な枠組みが欠けていたため、「思う」と「생각하다」の類似性と相違を体系的に関連付けて説明することができなかった。この問題に適切に取り組むためには、ヘッジ、発話行為理論、ポライトネス理論といった複数の理論的枠組みが必要である。そこで、本研究では、これらの理論的な枠組みに基づいて、指示型の発語内の力を持つ文と共起する「思う」と「생각하다」の相違を明らかにする¹⁾。

本研究は、理論的な枠組みを用いて日本語と韓国語のヘッジとして機能している「思

1) 実際に、大きく「思う」は、指示型の他に、断定型(assertives)と拘束型(commisives)の発語内の力を持つ文と共起する。一方、「생각하다」は、断定型の発語内の力を持つ文とのみ共起するが、本稿では紙面の制約上、指示型に限って考察を行う。

う」と「생각하다」の用法の違いを比較し、分析する試みである点に意義を持つ。

3. 理論的背景

本研究で用いるヘッジ、発話行為理論、ポライトネス理論といった3つの概念について簡単に説明する。

3.1. ヘッジ

ある発話の力を減少させるために、言わば緩和する装置の一つとしてヘッジ(hedge)がある(Lakoff1972, Brown&Levinson1978/1987(以下、B&L(1978/1987)と表記)、Caffi2007など)。ヘッジは、一般的に断言や直接的な表現を和らげる表現として知られている。

Itani(1996:30)は、ヘッジを用いることは、話者の発話によって伝えられている命題に対して、話者が限られた確信、関与を持っていることを伝達する語用論的な現象であると述べている。また、Itani(1996:11)によると、ヘッジは、言語表現の中で自然類を形成しているのではないが、どの言語にもある普遍的な現象である。また、ヘッジが実現される方法として、モーダル(modal)、心理動詞、副詞などを用いることで達成されることが多いと指摘している(Itani1996:30)。

ヘッジは、Itani(1996)、Fraser(1975)、Holmes(1984)、B&L(1978/1987)が論じているように、話者が何かの意図を持って、ある命題に対して、話者の限られた関与を伝えるといった用法を持つ。このような特徴が存在するのは、聴者に歓迎されない効力を持つ発話行為の力を軽減するためである。本研究では、「思う」がヘッジとして機能していると考えられる。

3.2. 発話行為理論

発話行為理論は、Austin(1962)によって提案され、Searle(1969)によって体制が整えられた。発話行為理論では、発話行為の基本的な側面を(i)発語行為(locutionary act)、(ii)発語内行為(illocutionary act)、(iii)発語媒介行為(perlocutionary act)の3つに下位分類しているが、発話行為の研究で特に問題とされるのは、(ii)の発語内行為である(山梨 1986:14)。また、発話行為という用語は、厳密に言えば、(ii)の発語内行為を指すものとして取り扱われてきている(Huang2007:103)。(ii)の発語内行為は、(i)の何かを言うという行為そのものではなく何かを言いつつ行われている行為、話者によって意図された行為である(山梨 1986、中園 2006)。言い換えれば、発語内行為は、話者が実行しようとする働きのタイプであり、または、話者が成し遂げようとする行為のタイプである(Huang2007:102)。一般に、(i)の発語行為を介して、命令、約束、依頼、質問、報告、

断り、感謝などの「発語内の力(illocutionary force)」を伴う行為が遂行される。命令、約束、依頼等が発語内行為に相当する。これらは、社会的慣習や社会制度の中で定義された行為である(Huang2007:102)。

「思う」を考察する際、多くの研究者は補文の内容に注目しているが、その補文の内容の分析は、研究者の恣意的な判断により、2 分類から 5 分類まで異なっている(仁田 1991、森山 1992、Yokomizo1998、山岡 2000、小野 2011)。Searle(1979)は、発語内行為を、断定型(assertives)、指示型(directives)、拘束型(commisives)、表現型(expressives)、宣言型(declarations)の 5 分類を提示している。本研究は、Searle(1979)が提案した発語内行為の分類を支持し、「思う」は断定型(assertives)、指示型(directives)、拘束型(commisives)と、「생각하다」は、断定型(assertives)の発語内の力を持つ文と共に共起すると考える。本稿では、紙面の制約上、1 節で示したように指示型(directives)の発語内の力を持つ文と共に共起する「思う」と「생각하다」について考える。

3.3. ポライトネス理論

ポライトネス理論は、「思う」と「생각하다」の類似性と相違に関する用法を明らかにするために重要な鍵となる概念である。ここでは、宇佐美(2002:100)に従ってポライトネス(politeness)を、「円満な人間関係を確立・維持するための行動」として考える。ポライトネスを用いた研究は世界中で盛んであり、近年、日本語と韓国語の対照研究にも導入されている。現在、ポライトネス理論には、4 つの主要なモデルがある(宇佐美 2002、Huang2007)。その中で、最も影響力があり、包括的なモデルは B&L(1978/1987)の「フェイス保持のための戦略としてのモデル」である(宇佐美 2002、Huang2007 など)²⁾。本研究でも、「思う」と「생각하다」との間にある類似性と相違がフェイス(face)を守るための戦略と関わっていると考えるため、B&L(1978/1987)の「フェイス保持のための戦略としてのモデル」を理論的な枠組みとして用いる。

なお、モータルとしても実現されるヘッジは、フェイスを守るためのポライトネス・ストラテジーの一つである。そして、主にネガティブ・ポライトネス・ストラテジーを実現するため

²⁾ B&L(1978/1987:62)は、人間の基本的な欲求としてフェイスという高度に抽象的な概念があると考えている。このフェイスには、「ネガティブ・フェイス」と「ポジティブ・フェイス」の 2 つのフェイスがあるとしている。宇佐美(2002:98)は、「ネガティブ・フェイス」とは、他人に邪魔されたくない、立ち入られたくないという「マイナス方向」への欲求であり、「ポジティブ・フェイス」とは、他人に理解されたい、好かれたい、他人に近づきたい、結束を高めたいという「プラス方向」への欲求であると説明している。B&L(1978/1987)は、この 2 つの「フェイス」が脅かされないように配慮することがポライトネスであると述べている。そして、「ネガティブ・フェイス」を侵害しないように配慮するストラテジーを「ネガティブ・ポライトネス・ストラテジー」、「ポジティブ・フェイス」を侵害しないように配慮するストラテジーを「ポジティブ・ポライトネス・ストラテジー」と述べている。

に使われる(B&L1978/1987:162)。

本研究で主題としている「思う」と「생각하다」との間にある類似性と相違は、同じ行動でも、日本と韓国の文化による、B&L(1978/1987)の「フェイス侵害度見積りの公式」における変数の差によって、ポライトネスの表現方法が大きく異なるためであると説明できる。ヘッジは、ポライトネス・ストラテジーの一つであり、ヘッジとして機能している「思う」と「생각하다」における類似性と相違は、ヘッジの使用によるポライトネス・ストラテジーの相違によるものであると考えられるからである。

4. 分析方法

分析には、B&L(1978/1987)の「フェイス侵害度見積りの公式」を用いる。B&L(1978/1987)は、具体的に数量化できるわけではないが、「フェイス侵害度(W_x)」は、おそらくはすべての文化で、3つの要因によって総合的に規定されるとして、以下のように公式化している。

$$(3) W_x = D(S, H) + P(H, S) + R_x \quad (\text{B\&L1978/1987:76})$$

ここで、 W_x は、フェイス侵害度(FT 度)、行為(x)が相手のフェイスを脅かす度合いである。まず、D は、話者(S)と聴者(H)の「社会的距離(social distance)」を示す値である(B&L 1978/1987:74)。通常、D の評価における大切な部分の一つは、安定的な様々な社会的属性に基づく社会的距離の測定であり、社会的親密さは、一般に、ポジティブ・フェイスを互いに満たしあうことに反映される(B&L1978/1987:77)。

また、P は、聴者(H)の話者(S)に対する「力(power)」の量である(B&L1978/1987:74)³⁾。つまり、P は、聴者(H)が自分の計画や自己評価を、話者(S)の計画や自己評価を犠牲にしても、押し付けることができる程度を指す。P の大きな差異は、敬意に典型的に反映される(B&L1978/1987:77)。

R_x は、「相手にかける負荷度」の絶対的順位に基づく重み(absolute Ranking of

3) 宇佐美(2002)は、D と P に関して、日本の敬語研究で指摘されてきた「親疎」、「上下」という社会的変数と非常に似ていると指摘している。しかし、宇佐美(2002)は、「B&L(1978/1987)の「フェイス侵害度見積りの公式」は、これらの変数が「 $W_x = D(S, H) + P(H, S) + R_x$ 」という公式の中で総合的に考慮され、相手のフェイスを脅かす度合いに縮約され、その高低が見積もられた上で、言語行動が決定されるという捉え方にまとめられると述べている(宇佐美 2002:101)。さらに、宇佐美(2002)は、この点で、B&L(1978/1987)の研究は、従来のポライトネス研究、敬語研究のアプローチいずれとも大きく異なり、ポライトネス研究に画期的な展開を切り開いたと評価している。

imposition)であり、その FTA_x が特定の文化でどの程度負担と見なされるかと示す値である(B&L1978/1987:76)。つまり、ネガティブ・フェイス欲求とポジティブ・フェイス欲求がどの程度侵害されることになると考えられるかによる、文化的かつ状況的に規定される負担の順序のことである(B&L1978/1987:77)。

以下では、ポライトネス理論の「フェイス侵害度(W_x)」で取り上げられた、社会的距離(D)、相対的力(P)、相手にかける負荷度(R)という変数を用いて、分析を行う⁴⁾。

D は、生越(2008、2012)に従って、次の 3 段階に分けて分析する。

- (4) a. 知り合いになったばかりで、心理的距離が遠い人間関係
- b. 年齢も近く、同じ学校に通うサークル仲間という心理的距離が遠くもなく近くもない中間の人間関係
- c. 家族関係という、他の人には話さないような個人的な感情や考えも共有するような心理的な近い人間関係

そして、P に関しては、生越(2008b、2012)と同様に、「思う」と「생각하다」の使用においても P による相違は殆どないと考えられるため、P は、同等であるものとして設定する。また、R に関しては、相手にかける負荷度の度合いが大きい場合と小さい場合の 2 段階に分けて考察を行う。R が大きい場合は、取引や身の拘束に関わるものと設定し、小さい場合は、無料の品物を設定する。つまり、P はすべての状況で影響がないものと想定した上で、D は 3 段階、R は 2 段階に分けて分析を行う⁵⁾。また、R は、D の段階に合わせ、同程度の負荷度の内容を設定した。そして、指示型の発話内行為について、内容の重要度が高い話題と低い話題について分析するが、このそれぞれの場合に、ヘッジの使用の適切さが人間関係 D の距離が遠い者、中間的な者、近い者によってどのように変化するかを調べる。

5. 考察

指示型の発話内の力を持つ文において「思う」は、従来の研究では共起していると考察されている(森山 1992、Yokomizo1998、山岡 2000、小野 2011)。しかし、D と R の変

⁴⁾ 以下では、便宜のために、それぞれ社会的距離(D)は D に、相対的力(P)は P に、相手にかける負荷度(R)は R に略す。

⁵⁾ ただし、D に関しては、多少、コンテクストに揺れが有り得る。なぜなら、言語使用において話者(S)の個別性は千差万別であり、聴者(H)との関係も固定化するのは難しいと考えられるからである。

数を与えてさらに詳しく考察を行うと共起する場合と共起しない場合がある。一方、「생각하다」は、D と R がどのように変化しても共起しない。

まず、相手にかける負荷度 R が大きい場合から説明する。

第一に、R が大きくて、D が遠い例から見てみよう。

話者(S)と聴者(H)は、知り合いになったばかりの同年輩のビジネスマンである。話者(S)は、聴者(H)に新規取引を始めたいと伝えようとしている。

まず、日本語の例を見てみよう。

- (5) a. 御社との取引を始めさせていただきたいと思います。
- b. 御社との取引を始めさせていただきたいです。

指示は、主に聴者(H)のネガティブ・フェイスを威嚇するFTA である(B&L1978/1987:6 5-66)。まず、(5ab)が示しているように、「思う」が用いられている(5a)も、自然であり、「思う」が用いられていない(5b)も、自然である。(5a)は、企業同士の話し合いとして相互了解のもと、取引を開始することを伝えている。そして、「思う」がヘッジとしても用いられている。(5b)は、話者(S)が一方向的に思っているのかもしれない、「です・ます」だけで言い切っている。

次に、韓国語の例を見てみよう。(6ab)の韓国語は、(5ab)の日本語に対応する。

- (6) a. ??귀사와의 거래를 시작하고 싶다고 생각합니다.
- b. 귀사와의 거래를 시작하고 싶습니다.

(6ab)が示しているように、韓国語では、「생각하다」が用いられている(6a)は、不自然であるが、「생각하다」が用いられていない(6b)は、自然である。(6a)のように「생각하다」が用いて不確定かつ曖昧さを残して願うと、聴者(H)の承認を引き起こしにくい。(6b)のように「합니다・습니다」で言い切って願望を示した方がいい。

このように、指示型の発語内の力を持つ文において、R が大きくて、D が知り合いになったばかりの遠い人間関係では、日本語では「思う」がヘッジとして用いられるが、韓国語では、「생각하다」は用いられないことが解る。

第二に、R が大きくて、D が中間の人間関係で、例を見てみよう。

話者(S)は、最近、成績が下降気味の仲間の聴者(H)に、自分が通っている塾に行くことを勧めている。しかし、話者(S)は、テレビを見る時間が減るので、行きたくないと言っている。まず、日本語の例を見てみよう。

- (7) a. 放課後、塾に行ったほうが良いと思うよ。

b. 放課後、塾に行ったほうがいい(よ)。

(7ab)が示しているように、「思う」が用いられている(7a)も、自然であるが、「思う」が用いられていない(7b)も、自然である。(7a)は、ヘッジとして「思う」を用いることによって、塾に行きたくない聴者(H)のフェイスも配慮している。また、(7b)は、「よ」を付けるか付けないかによって大きくて、感じが変わる。「よ」をつけないと、後は知らないといった突き放した感じがし、「よ」をつけると、聴者(H)のことを思って進言している感じに変わる。この場合、「よ」が(7a)の「思う」とほぼ同じく、発語内の力を弱める役割を果たしていると考えられる。

次に、韓国語の例を見てみよう。(8ab)の韓国語は、(7ab)の日本語に対応する。

(8) a. ??방과 후 학원에 가는 게 좋다고 생각해.

b. 방과 후 학원에 가는 게 좋아.

(8ab)が示しているように、韓国語では、むしろ「생각하다」が用いられている(8a)は、不自然であり、「생각하다」が用いられていない(8b)は、自然である。Dが中間の人間関係で、Rが大きいのを聴者に提案する際、(8a)のように「생각하다」が用いて曖昧さを残すのは好ましくなく、聴者のために進言する場合も、(8b)のように、ヘッジを使わない方がいい。

このように、指示型の発語内の力を持つ文において相手にかかる負荷度 R が大きくて、D が仲間という中間の人間関係の場合では、日本語では、「思う」がヘッジとして用いられるが、韓国語では、「생각하다」がヘッジとして用いない。

第三に、R が大きくて、D が近い人間関係で、例を見てみよう。

男性の話者(S)は、幼馴染だった聴者(H)に向け、プロポーズしようとしている。

まず、日本語の例を見てみよう。

(9) a.?? 結婚したいと思う。

b. 結婚してくれ。

(9ab)が示しているように、「思う」が用いられている(9a)は、不自然であるが、「思う」が用いられていない(9b)は、自然である⁶⁾。聴者(H)に結婚という重要なことを要求する際、(9a)

6) この例は、私の見る限り、日本語の例の中で、母語話者の解釈の見解が分かれた。(7a)も、聴者(H)の意向を尊重する感じがし、使われると判断した日本語母語話者もいるが、ここではMP(model person)の発話として不適切だと判断する。

のように、ヘッジの「思う」を使うのは適切ではない。(9b)のように、ヘッジを用いないで、話者(S)の強い気持ちを伝えるのが自然である。

次に、韓国語の例を見てみよう。(10ab)の韓国語は、(9ab)の日本語に対応する。

- (10) a. ??결혼하고 싶다고 생각해.
b. 결혼해 줘.

一方、韓国語では、日本語と同様に、「생각하다」が用いられている(10a)は、不自然であり、「생각하다」が用いられていない(10b)が自然となる。まず、韓国語では「タイと思う」に当たる形式自体が存在しない(金芝賢 2013:43)⁷⁾。プロポーズという話者(S)の強い気持ちを伝えるべき文脈で、(10a)のように、「생각하다」を用いて、不確実な気持ちを示すと相手から承諾を貰えない。つまり、韓国語では、(10b)が示しているように、「생각하다」をヘッジとして用いることはできない。

このように、指示型において、相手にかかる負荷度 R が大きくて、D が近い人間関係の場合は、日本語でも韓国語でも「思う」と「생각하다」をヘッジとして用いることはできないことがわかる。

今度は、相手にかかる負荷度 R が小さい場合を説明する。

第一に、R が小さくて、D が遠い人間関係で、例を見てみよう。話者(S)と聴者(H)は、知り合いになったばかりの心的距離感が遠いビジネスマンであり、ホテルで宴会が開かれ、話者(S)は代表として、乾杯の音頭を取ろうとしている。

まず、日本語の例を見てみよう。

- (11) a. それでは、乾杯したいと思います。
b. それでは、乾杯します。

まず、(11ab)が示しているように、「思う」が用いられている(11a)は、自然であるが、「思う」が用いられていない(11b)も、自然である。(10a)は、「ます」に加えて「思う」を用いることで、適度な距離を保っているうえで、話者(S)と聴者(H)の間の共通の出来事に祝杯を挙げるといふ「意識の共有」を図ることが可能となり、「思う」がヘッジとして用いられている。(11b)は、実際のところ、(11a)と質的差異は殆どないが(森山 1992:110)、「ます」だけで断定的に言うことで、「何に乾杯するか、説明する必要もないですよね」という話者(S)の意志が表現されているという解釈が可能となる。

7) 李芝賢(2013:42-43)では、日本語の「たいと思う」を韓国語に訳すと非常に不自然であり、韓国語では無標として現れると指摘し、日本語独特な用法として取り扱っている。

次に、韓国語の例を見てみよう。(12ab)の韓国語は、(11ab)の日本語に対応する。

- (12) a. ??그럼, 건배하고 싶다고 생각합니다.
b. 그럼, 건배하겠습니다.

一方、韓国語では、「생각하다」が用いられている(12a)は、不自然であり、「생각하다」が用いられていない(12b)が自然となる。韓国語では、(12a)のように、「생각하다」を用いて、代表となる者が曖昧さを残して、乾杯の音頭を提案するのは違和感がある。(12b)のように、話者(S)と聴者(H)の心的距離が大きいことを示す「입니다・습니다(です・ます)」だけでも、十分に丁寧さが伝わる。

このように、指示型の発語内の力を持つ文において、R が小さくて、D が知り合いになっただけの遠い人間関係の場合は、日本語では、「思う」がヘッジとして用いられるが、韓国語では、「생각하다」は、ヘッジとして用いられないことが解る。

第二に、R が小さくて、D が中間の人間関係で、例を見てみよう。

話者(S)と聴者(H)は、年齢が近く、同じ学校に通うサークル仲間であり、飲み会で乾杯の音頭を取ろうとしている。まず、日本語の例を見てみよう。

- (13) a. ??それでは、乾杯したいと思う。
b. それでは、乾杯！

(13ab)が示しているように、「思う」が用いられている(13a)は、不自然であるが、「思う」が用いられていない(13b)は、自然である。サークル仲間という中間の人間関係で乾杯のような負荷の小さいことを提案するなら、日本語では、(13b)のように、ヘッジを用いない。

次に、韓国語の例を見てみよう。(14ab)の韓国語は、(13ab)の日本語に対応する。

- (14) a. ??그럼, 건배하고 싶다고 생각해.
b. 그럼, 건배!

一方、韓国語でも、同様に「생각하다」が用いられている(14a)は、曖昧で違和感があり、「생각하다」が用いられていない(14b)が明確で自然となる。

このように、指示型の発語内の力を持つ文において、R が小さくて、D がサークル仲間という中間の人間関係の場合は、日本語でも韓国語でも「思う」と「생각하다」はヘッジとして用いられないことがわかる。

第三に、R が小さくて、D が近い人間関係で、例を見てみよう。

兄の話者(S)は、弟の聴者(H)と共に一杯しようとしている。この場合は、上記の第五の

場合と、「思う」と「생각하다」の使用が同様であると考えられるため、例のみ提示し、説明は省略する。(16ab)の韓国語は、(15ab)の日本語に対応する。

- (15) a. ??乾杯したいと思う。
 b. 乾杯！
 (16) a. ??건배하고 싶다고 생각해.
 b. 건배!

このように第五で示した変数から D が家族同士という最も親密な人間関係に変わっても、日本語でも韓国語でも「思う」と「생각하다」は、ヘッジとして用いられない。

6. おわりに

本研究では、ポライトネス・ストラテジーとして用いられる「思う」と「생각하다」について特に、指示型の発語内の力を持つ文に現れる場合を対象として考察を行った。

従来の研究では、「思う」は、指示型の発語内の力を持つ文とは共起していると考察されていた。しかし、B&L(1978/1987)の「フェイス侵害度見積もりの公式」を理論的な枠組みとして用いて分析した結果、「思う」は、3つの場合ヘッジとして用いられた。1)相手にかける負荷度 R が大きくて D が遠い人間関係と、2)R が大きくて D が中間の人間関係と、3)R が小さくて D が遠い人間関係で、「思う」がヘッジとして用いられることが明らかになった。

一方、「생각하다」は、指示型の発語内の力を持つ文においては、D の遠近、R の大小によらず、ヘッジとして用いると不自然になる。

Itani(1996)は、「ヘッジの適切な量(the ‘appropriate’ amount of social hedging varies)」に関しては、文化的な側面が重要な役割を果たしていると説明しているが、ヘッジとして「思う」と「생각하다」の使用は、この指摘を裏付けており、日本語のコンテキストと韓国語のコンテキストの間でも同様のことが起こっていると考えられる。

本研究では、作例を用いて分析を行っているが、実際、「思う」と「생각하다」の使用は、音調や他の終助詞との結合によってまた差が出てくると思う。ここでは、これ以上踏み込むことができないが、今後の研究課題に残したい。

[付記]

本稿は、筆者の博士論文の 7 章と 8 章の内容を基にして、韓国日本文化学会第 47 回国際学術大会において発表を行ったものを加筆・修正したものである。発表時にいろいろのご意見を頂いたことをこの場を借りてお礼申し上げます。

【参考文献】

- 李鳳(2008)「『思う』と『생각하다』の用法について」『日本語学研究』22, 韓国日本語学会, 231-241 頁
- 李鳳(2009)「『思う』と『생각하다』のヘッジ(hedge)としての機能について」『日本語学研究』25, 韓国日本語学会, 143-156 頁
- 李鳳(2014)「『思う』と『생각하다』の日韓対照研究—ヘッジとポライトネスの観点から—」北海道大学博士論文, 69-168 頁
- 李芝賢(2013)『현대 일본어 배려표현 연구-한국어와의 대조 관점에서-』명지대학교 박사논문, 40-43 頁
- 鄭夏準(2006)「『と思う』의 번역례 연구」『日本語文学』31, 韓国日本語文学会, 289-308 頁
- 宇佐美まゆみ(2002)「ポライトネス理論の展開」『月刊言語』31, 1, 大修館書店, 101-105 頁
- 生越直樹(2008a)「日本語「と思う」と朝鮮語「고 생각하다」について」『日本語と朝鮮語の対照研究Ⅱ』東京大学21世紀CEOプログラム「心とことば—進化認知科学的展開」研究報告書, 47-54 頁
- 生越直樹/尾崎喜光編(2008b)「相手所有物を使う際の言葉の有無に関する日韓比較」『対人行動の日韓対照研究—言語行動の基底にあるもの—』ひつじ書房, 31-60 頁
- 生越直樹・三宅和子/野田尚史/生越直樹編(2012)「「配慮」の示し方—日本と韓国の言語行動の比較から—」『「配慮」はどのように示されるのか』ひつじ書房, 171-187 頁
- 小野正樹(2011)「日本語思考動詞の主観性」『ひつじ意味論講座第 5 巻主観性と主体性』創刊号, ひつじ書房, 193-209 頁
- 中園篤典(2006)『発話行為的引用論の試み』ひつじ書房, 79-123 頁
- 森山卓郎(1992)「文末思考動詞『思う』をめぐって—一文の意味としての主観性・客観性—」『日本語学』11 卷 9 号, 明治書院, 105-116 頁
- 山岡政紀(2000)『日本語の述語と文機能』くろしお出版, 31-46 頁
- 山梨正明(1986)『発話行為』大修館書店, 9-52 頁

- Austin, J. L.(1962) *How to do things with words*. Oxford University Press.
- Brown, Penelope and Stephen C. Levinson (1978/1987) *Politeness: Some universals in language usage*, Cambridge University Press. pp.55-60.
- Caffi, Claudia(2007) *Mitigation*, Elsevier.pp.47-68.
- Fraser, Bruce(1975) “Hedged performatives,” In Peter Cole and Jerry L. Morgan (1975) *SYNTAX and SEMANTICS 3: Speech Acts*, Academic Press. pp.187-210.
- Holmes, Janet(1984) “Modifying illocutionary force”, *Journal of Pragmatics* 8, pp.345-365.
- Itani, Reiko(1996) *Semantics and Pragmatics of Hedges in English and Japanese*, Hituzi Syobo. pp.9-53.
- Lakoff, George(1972) Hedges:a study in meaning criteria and the logic of fussy concepts, *The 8th Regional Meeting of the Chicago Linguistic Society*, pp.182-228.
- Searle, John R.(1969) *Speech Acts:An Essay in the Philosophy of Language*, Cambridge University Press [坂本百大・土屋俊訳(1986)『言語行為—言語行為理論研究—』勁草書房, 1-51 頁]
- Searle, John R.(1977) The classification of illocutionary acts, *Language in Society* 8, pp.137-51.
- Searle, John R.(1979)*Expression and Meaning :Studies in the Theory of Speech Acts*, Cambridge University Press [山田友幸訳(2006)『表現と意味—言語行為理論研究—』誠信書房 1-51 頁]
- Yang Huang(2007) *Pragmatics*, Oxford University Press. pp.91-131.
- Yokomizo Shinichiro(1998) 「Believing, Wanting, and Feeling : Three Representational Modes of Embedded Propositional Contents」『世界の日本語教育』8号,国際交流基金日本語国際センター, pp.167-189.

要 旨

There has been increasing studies on the different usage of ‘omou’ and ‘saenggakhada’ in recent years. Prior research did not include a theoretical concept of ‘omou’ and ‘saenggakhada’, and therefore was unable to provide a scientific explanation in the comparative analysis of these two words.

Drawing on the notion of *hedge*, speech act theory, and politeness theory, this paper focuses on ‘omou’ and ‘saenggakhada’ used as directives for politeness strategy.

Prior research has shown that ‘omou’ co-occurs with a sentence which has illocutionary force as directives. However, applying the “weightiness (W) of a face-threatening act (FTA_x)” from theory of politeness by Brown & Levinson (1978/1987) as a theoretical framework for the analysis, this paper finds that ‘omou’ is used as *hedge* in following incidences: a) where risk (R) is high and distance (D) is far, b) where risk (R) is low and distance (D) is far, and c) where risk (R) is high and distance (D) is intermediate in the value of relationship.

In contrast, ‘saenggakhada’ is constrained when used as *hedge* in a sentence which has illocutionary force as directives, regardless of the degree of distance (D) and extent of risk (R).

According to Itani (1996), “cultural aspects play an important role since the ‘appropriate’ amount of social hedging varies from culture to culture.” Using ‘omou’ and ‘saenggakhada’ as *hedge* supports this observation, and it can be witnessed in the context of both languages - Japanese and Korean.

키워드 : omou, saenggakhada, hedge, speech act theory, politeness,
directives

투 고 : 2014. 11. 30
1차 심사 : 2014. 12. 13
2차 심사 : 2015. 1. 3